
とある子猫の勘違い

蒼城雪紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある子猫の勘違い

【Nコード】

N2810U

【作者名】

蒼城雪紫

【あらすじ】

とある子猫と、死にたかった女の子の話。

(前書き)

内容が若干鬱です。大丈夫な方のみどうぞ。

とある場所に、捨てられた子猫がいました。生まれて間もなく、飼い主の都合で捨てられてしまった子猫でした。子猫は親猫から生きる術を教えてもらう前に引き離されてしまったので、何をすればいいのかわからず、最初は段ボールの中から外を見ることしかできませんでした。

数日経っても、子猫は拾われることはありませんでした。餌を与える人もいません。子猫が捨てられた場所は人通りがあまりない場所、人は皆、子猫を見つけないのです。

外に出ようとしないその子猫は当然何も食べていません。だから、お腹が減ってきます。けれど、どうすればいいのかわからず、外に出る勇気のなかった子猫はやはり段ボールの中に居続けました。

？おかあさん、おかあさん？

子猫は親猫に助けを求めました。けれど、鳴いても鳴いても、子猫の前に親猫が現れることなどありません。そんなことなど知らず、子猫は何度も何度も、親猫を呼びます。鳴き声をあげても、空腹感が増すばかりでした。

？おかあさん？？

「どうしたんだい、君？」

子猫の前に現れたのは、親猫ではありませんでした。下校途中のとある少女でした。その少女は子猫を見つけて、頭を撫でました。

「捨てられちゃったのか、可哀そうに。ちょっと待ってね」

少女はどこかに走っていきました。しばらくして、少女は手に何かを持って戻ってきました。牛乳と紙皿でした。少女はコンビニの袋からその二つを出すと、子猫を段ボールの外に出して、その前に紙皿を置き、牛乳を出しました。

「はい、どうぞ。ちゃんとしたお皿じゃなくて申し訳ないけど」

子猫は親猫のお乳に似たそれを、最初は興味深そうに見つめるだけで飲もうとしませんでした。しかし、子猫は空腹に耐えきれず、勇気を出して少し飲んでみました。

？おかあさんのおちちとはちがうけど、おいしい……？

「牛乳、気に入ってくれたみたいだね。ほら、いっぱいあるから遠慮しないで」

子猫は牛乳が気に入ったようで、紙皿に出された牛乳を飲み干しました。少女はまた紙皿に牛乳を出して子猫に飲ませます。満足いくまで牛乳を飲んだ頃には、子猫はすっかり元気になっていました。

「よかった、元気になって」

？ありがとう？

「君は可愛いんだから、誰かが拾ってくれるかもしれない。だから、死んだらダメだよ」

？だれかが、ひろってくれる……おかあさんには、もうあえないのかな……？

「元の飼い主さんとか、お母さんとは離れ離れのままだとは思うけど……君はきつと、私と違って誰かが必要としてくれるよ」

少女はしゃがみこみ、また子猫の頭を撫でました。少女の瞳は、どこか悲しげでした。

「ねえ、知ってるかい？ 世の中は死にたいと思ってる人は死なないで、生きたいって願ってる人が死んじゃうんだよ」

？しぬ？ それってなあに？？

「なんでだろうね。生きたいって願う人には生きてほしいって願ってくれる人も当然いる。だから、生きたいって願う人がいなくなれば、皆悲しむはずなのにね」

？いなくなる……おかあさんみたいに、いなくなっちゃうの？？

「酷いよね、死にたいって思ってた私より先に死んじゃうなんてさ」

少女は子猫に話しかけているというよりは、自分自身に語りかけ

ているようでした。少女の瞳からは涙が流れ、地面を濡らしました。

？どうしたの？ どこかいたいの？？

「この世でひとりみたいなんだよ……もう、生きてたって意味ないよ……」

？どうして？？

「元々死にたかったのに……もう、私のことを理解してくれる人なんて、いないよ！ 生きてたって、しょうがないよ！」

？おねえちゃんはひとりなの？？

「きつと皆、私が死ねばよかったって思ってる……なのに、なんで私が死ななかったの……！ 私なんか、生きてても仕方ないのに！」

？おねえちゃんは、いきでちゃいけないの？？

「死にたい、死にたいよ……ッ！」

？おねえちゃんは、しにたいの？？

少女は子猫のことなど気にせず、泣き崩れました。ただただ、そこで泣き続けました。そして、何度も願いました。死にたい、死にたい、と。しばらくすると、少女は落ち着き、申し訳なさそうにもう一度子猫の頭を撫で、段ボールの中に子猫を戻しました。

「ゴメンね、泣いちゃって」

？ううん、べつにいいよ？

「私は君を拾ってあげれないけど、きつといつか拾ってくれる人が現れるよ。それまでは、毎日牛乳持ってきてあげるからね」

？ありがとう、おねえちゃん？

「それじゃあ、またね」

少女は立ち上がり、自分の家に帰ろうと歩き出しました。子猫はふと思いました。このまま彼女をひとりにしたら、また彼女はひとりで悲しみ、泣き崩れるのではないかと。

子猫は心配になりました。子猫は段ボールの中から飛び出して、少女を追いました。しかし、その途中で道路に差し掛かり、そこでトラックにはねられて死んでしまいました。

？おねえちゃん、ないてないかな？

子猫は死んでも、少女のことが心配でした。そして、牛乳のお礼をしていないことも心残りでした。自分のことなど忘れて少女のことを思う子猫の魂はナニカと結びつき、子猫は不思議な力を得て、カミになりました。

カミになった子猫は思いました。この力で少女の願い事を叶えてあげよう。そうすれば、自分が心配し続けることもないし、お礼もできる。

でも、少女の願いを叶えるにはまだカミとして力が足りませんでした。なので、数年間その力を強くするために眠り続けました。

＊ ＊ ＊

カミとして十分な力を持って目覚めたとき、少女は成長し、大人になっていました。

以前会った彼女の面影はあるものの、化粧をしたり、髪を染めたりして、彼女はとても女として可愛くなっていました。

彼女は道路で信号待ちをしていました。右手には携帯電話。どうやらメールをしていていたようです。途中で電話がかかってきて、彼女はその電話に出ました。

「あ、もしもし、ヒロコ？　よかった、今ちょうど相談したいことがあったの！」

彼女の願いを早く叶えてあげたかった子猫は、彼女の様子はあまり気にせず、力を使いました。

？君の願い事、やっと叶えてあげられるよ？

信号が青になり、彼女が電話をしながら歩道を歩きだしました。その瞬間、横からトラックが突っ込んできました。案の定、彼女はトラックにはねられました。彼女は血だらけで、傷からは次々血が流れて行きました。

「な、んで……」

彼女はまるで信じられない、といったような表情を見せました。
とても絶望した様子でした。

『ちょっと、ねえユミッ！ ユミッ！』

少し離れた場所に飛んだ携帯から聞こえてくる声に、彼女は反応し、手を伸ばそうとしました。けれど、もう彼女にはその携帯を手取る力は残っていませんでした。

「ひ、ろこ……た、く……ッ！」

彼女は誰かの名前を呼び、以前のように涙を流しました。
願い事を叶えれば喜んでくれると思っていた子猫は彼女の様子が不思議でたまりませんでした。

？どうしてそんな顔するの？ 君の願いを叶えてあげたのに、どうして？？

子猫は知らなかったのです。彼女は、もう死にたいと願っていないことを。理解してくれる人を得ていたことを。しかし、子猫は以前の彼女の願いを叶えてしまったのでした。

新着メール一件

FROM .. タク

じゃあ、式場はあそこでいいんだな？
ユミがいいなら、それでいいんだけどさ
結婚指輪のことも、家に帰ったらじっくり話そうな

(後書き)

前回同様、他サイトに載せた作品です。最後のメール文章は、『彼女』の携帯電話に入ったメールです。そういうことになってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810u/>

とある子猫の勘違い

2011年10月8日10時59分発行